

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名小梁川 雅

学科名・専攻名森林総合科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない
点検項目に対する 現状説明	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。	学科および各教員が協力して、最初に学習意欲を高め、徐々に専門的な教育へと展開している。 試験の結果や授業評価、授業中の学生の反応などをもとに、工夫を行っている。学外実習や実習施設の充実を学科や研究室で行っている。	教員が成績評価の基準、採点後の試験やレポートの返却、試験の答案例の明示などを行っている。	3，4年生は全員が研究室に所属し、学生と教員の距離が近いため、単なる知識、技能の習得のみならず、ディプロマポリシーの重視している「問題発見能力」、「問題解決能力」、「コミュニケーション能力」の習得レベルを指導教員が把握し、評価している。	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学生は2年時に研究室を選択し、3年時に各研究室へ所属し専攻演習を受講し、4年時の卒業論文へとつなげる。	【長所】 フレッシュマンセミナーで学習意識を高めるなどの工夫をしている。 学外オリエンテーションでは富士宮市に一泊して、森林で学ぶことを紹介している。	【長所】 教育の評価については、各担当教員が責任をもって実施している。実習科目については、オリエンテーションを行い、基準についての説明をしている。	【長所】 なし	【長所】 ・学生は2年時に研究室を選択し、3年時に各研究室へ所属し専攻演習を受講し、4年時の卒業論文へとつなげる。
	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。	【特色】 できるだけ現地に行き現状を学ぶ。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきていて、学科全体の講義や実習との関連付けが必要。	【問題点】 学内での講義に加え運營業務などが多く、学外への調査研究が十分にやりにくい状況である。	【問題点】 なし	【問題点】 各自の判断に任せがちであり、学科としての確認が不十分である。	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきていて、学科全体の講義や実習との関連付けが必要。
	【課題】 ・カリキュラム改正後の効果発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 ・カリキュラム改正後の効果発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 留年や卒業できない学生が比較的多い。卒業生アンケートなど分析の必要性。	【課題】 留年や卒業できない学生が比較的多い。	【課題】 ・カリキュラム改正後の効果発揮や実習等への関連付けの確認。
根拠資料名	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP	オリエン手引き新入生、入学式時資料1、入学式時資料2 森林総合科学科研究室紹介	シラバス確認書類＊	シラバスに明記している。 現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	一般入試、センター試験利用入試の受験生に対しては、大学案内、大学ホームページ、オープンキャンパス、学科パンフレットなどでアドミッションポリシーを公開している。また、指定校をはじめ、一般推薦入試の受験生を送り出す可能性のある高校には、出前授業や学校訪問を積極的に実施している。	学科の中高生応援実務委員会では、入学制の受験制度、出身高校などのデータを収集、分析し、指定校の見直し、学校訪問先の選択、学科パンフレットや学科 PR パネルなど広報資料の修正、作成を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多分野の教員が合同で検討して問題作成を行っている。	【長所】 ・入試時に、受験動機、学科パンフレットやキャンパス見学会への参加などについて確認をしている。
	【特色】 ・入試時にアドミッションポリシーを配布して確認をしている。 採点基準、面接項目は、事前に確認して実施している。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・分野名変更を行い、研究室の分野体制を変更したので、具体的な指導体制を検討する。	【問題点】 ・障がいをもっている学生への対応を行っている。
	【課題】 ・分野名変更、研究室体制の変更に伴う具体的な方針の検討と確認をする。	【課題】 ・障がいを有する学生対応を行うため教員の負担となっている。 ・卒業生へのアンケートを分析して確認する。
根拠資料名	出題委員の選出資料＊ AO キャリア入試小論文採点表、AO 入試面接諮問など	AO キャリア入試小論文採点表、AO 入試面接諮問など 指定校の見直し＊ 学校訪問等の確認＊

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科の教育組織の編制方針のとおりであり、学科内で認識を共有している。 より効果的な教育のために、将来分野の編成の変更を検討している。	分野、研究室の編制見直し、教員の配置や年齢構成、将来的な人事計画（昇格、新規採用等）などを拡大主任会等で検討している。	任期制教員の面談と確認、 昇格に対する現状や希望の確認を随時行っている。 教員2名が任期制教職員から専任化教職員へと昇格予定。 教員1名が助教から准教授へ昇格	国外依命留学など中堅・若手教員の資質向上を図るための計画を作成中である。そのための分野・研究室教員間の協力体制も検討している。 任期制教員に対しては、定期的に面談を行い、状況を確認している。 教員1名が依命留学を申請している。	分野や研究室体制については、将来構想委員会などで検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科の分野名を段階的な分野設定から視点や手法に基づく分野へと変更しつつある。	【長所】 ・拡大主任会で、人事計画については検討している。	【長所】 ・拡大主任会で、人事計画については検討している。	【長所】 ・若手教員が依命留学に行けるような体制を整えている。	【長所】 ・なし
	【特色】	【特色】 ・森林を取り巻く総合的なアプローチが可能である。	【特色】 ・なし	【特色】 ・該当する研究室の受け入れ人数を調整したりしている。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 退職教員に対応した枠取り申請などが計画段階にあり、対応する必要がある。	【問題点】 ・人事体制のさらなる明確化。	【問題点】 ・若手教員の負担が多くなってきているので、全体で分担するように心がけている。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・分野名の変更に伴う状況について、確認をする。
	【課題】 ・分野名変更、研究室構成変更に伴う新体制の構築	【課題】 ・具体的な人事体制を明確にする。	【課題】 ・教育業績だけでなく、大学や学科への貢献度や学生対応なども考慮する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	将来構想委員会資料 学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版、教育懇談会資料	拡大主任会開催＊	拡大主任会開催＊	任期制面談記録＊ 海外依命留学資料＊	学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版

学部名 地域環境科学部

学部長名 小梁川 雅

学科名 生産環境工学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成している。 1、2年次には分野共通的な科目を、学年の進行に伴い、分野・研究室を意識指させるような専門教育科目を配置している。	個人面談を定期的実施している。 また、教育点検委員会や各科目関連の検討委員会を設置し、効果的な教育を行うための措置を講じている。教員相互の授業視察を実施している。答案・レポート返却を実施し、復習させるように努めている。授業評価アンケート結果には所見を付すようにしている。	成績評価の方法や基準はシラバスに明記している。試験については正答の開示を行い、採点後の答案や添削したレポートの返却を実施している。また、学科共通的な科目の成績評価は、教育改善委員会で相互に確認を行っている。最終的な単位認定・学位授与については、教員会で判定している。	定期的に行う個人面談で学習成果の把握を実施している。面談では学生本人からの履修状況の申し出とともに、学生カルテ掲載の成績を利用している。 技術者養成コースの学生には学習目標達成度評価を行ってもらっている。	教育改善委員会は毎週、教育点検委員会、技術者教育検討委員会は月 1 回程度、教育システム評価委員会、非常勤講師懇談会は年 1 回開催し、定期的に教育課程及びその内容、方法の適切性を点検・評価し、恒常的に改善・向上に向けた取り組みを行っている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・分野・研究室・教員へと所属を細分化することで、専門教育への導入を緩やかに、かつ効果的に行うことができる。	【長所】 ・様々な措置により学生の学習意欲を高く保つことができる。	【長所】 ・学生が納得できる評価を行えている。 ・共通的な科目では教員間での極端な評価の差を解消できる。	【長所】 ・個人面談は学生の履修状況を把握するのに利用できる。 ・達成度評価は学生と教員による把握を容易としている。	【長所】 ・問題が生じた場合の改善策を迅速に議論し、改善への取り組みの着手が容易である。
	【特色】 ・工学的な専門科目を理解できるように理数系の基礎科目を配置している。	【特色】 ・定期的な個人面談、授業視察、答案・レポート返却など実施している。	【特色】 ・評価について科目担当教員以外の監視を受けている。	【特色】 ・個人面談を実施して対応している。	【特色】 ・教育システムに関して学外の評価を取り入れられる仕組みとなっている。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・低学年次に、学生が興味を持ちやすい実習的、現場体験的授業が少ない。	【問題点】 ・個人面談実施に応答しない学生や質問しない学生、答案レポート返却を受けない学生がいる。	【問題点】 ・答案の返却によって過去の試験問題が流出するため、授業全般に対して幅広く学習する姿勢が低下する可能性がある。	【問題点】 ・現在、達成度評価は技術者養成コースの学生のみ作成している。 ・履修モデルに従わない学生がいる。	【問題点】 ・点検項目には問題ないが、委員会が過多となり、教員の労働負担が過大となっている。
	【課題】 ・次期カリキュラム改正に併せて、現場体験的な内容の授業科目を導入するなど、実効性の高いものへとしていかなければならない。	【課題】 ・学習意欲のまったくない学生への対応を検討していかなければならない。	【課題】 ・試験の出題法や評価の仕方を工夫する必要がある。	【課題】 ・全学生が達成度評価を行うように指導していく。 ・履修モデルに沿った履修を行うように指導を強化する必要がある。	【課題】 ・ルーチンワークとして実施できる部分は簡素化し、改善・向上への取り組みを実効性のあるものとする。
根拠資料名	カリキュラム・ポリシー (a1-①-1) 学科開設科目 (a1-①-2) カリキュラムツリー (a1-①-3)	学生状況調査(1年) (a1-②-1)	ポートフォリオ内容一覧 (a1-③-1)	ディプロマ・ポリシー (a1-④-1) 学習目標達成度自己評価 (a1-④-2)	教育点検委員会活動報告 (a1-⑤-1)

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学の学生募集・入学者選抜には、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜（3科目型、4科目型）の他、自己推薦型選抜、公募型選抜、特別選抜などがあり、自己推薦型選抜には、キャリアデザイン総合型選抜、高校で学んだ実践スキル総合型選抜、東京農大ファミリー総合型選抜が、公募型選抜には一般学校推薦型選抜が、特別選抜には指定校推薦型選抜、併設高校推薦型選抜などがある。一般選抜はA日程、B日程が、大学入学共通テスト利用選抜においても前期募集と後期募集(後期は3科目型のみ)が整備されている。特に、指定校推薦型選抜の指定校は学科が選定することになっており、全国にわたって多様な高校を指定している。これら選抜制度により多様な高校生の確保を可能としている。また、合否判定には、一般選抜及び大学入学共通テストでは筆記試験の点数により、その他の選抜制度においては、学科独自で出題する小論文や学科教員で対応する面接あるいは口頭試問により適性を判断し、各試験終了後に開催する合否判定会議において結果を総合して評価し合否を判定している。このようにして公正な入学者選抜を実現している。	学生の受け入れの適切性については、各入試制度の終了後の学科での合否判定の際に点検を行っている。必要に応じて改善・向上に向けた取り組みを行っている。また毎年、大学主導のもと入試制度について点検と見直しを実施している。アドミッションポリシーについては、大学案内やホームページの更新の際に見直しを行っている。また、在学生の成績と併せて、個人面談を実施するなどして在学生の状況を把握し、入学制度別に整理することで、入学時の受け入れの適切性の評価につなげている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多様な入試制度は、多くの受験機会を高校生に与えることになっている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・多様な入試制度を併用することは、入学後において資質や経験において多様な学生が共存することになり、在学期間中のみならず卒業後にも重要な、成長の場を提供することになる。 ・指定校推薦型選抜等で地方出身の学生を数多く入学させ、卒業後に地方で就職させる、ということは、まさに「人物を畑に還す」という本学のポリシーに則している。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多様な入試制度を併用することは、多様な学生が入学するということになるが、学力の差が大きい学生が入学してくる場合もあり、入学後の教育の負担が大きくなる。	【問題点】 ・入試は大学主導のもと実施されている。学科としては入試科目の中の選択科目の設定は任されているが、必須科目と選択科目を自由に指定できない。
	【課題】 入学後の教育についていける能力のある学生の質を入学者選抜で判定しなければならないが、一方で、志願者数の確保も重要であり、引き続き検討していかなければならない。	【課題】 ・学科の独自性を活かし、より多様な学生を確保するために学科あるいは学部独自で入試を実施するということも考えられる。 ・2022年度入試では大学入学共通テスト(2科目型)が開始される。本学科では英語を選択科目から除外する予定である。
根拠資料名	募集人員（a2-①-1） 入試制度別受験者数の推移（a2-①-2） 評価結果(一般学校推薦）(a2-①-3)	満足度調査結果（a2-②-1）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業土木学系 2 分野と農業機械学系 1 分野、それに情報工学系 1 分野の計 4 分野で、さらに各分野は 2 つの研究室で構成されている。各研究室には複数名の教員を配置するようにしている。	6 研究室には 2 名ずつ、2 研究室には 3 名ずつの教員を適切に配置していることで、各分野・各研究室の教育・研究活動を網羅的に実行している。	教員の欠員が生じる場合には、直ちに適切な教員構成となるよう人事計画を策定し実行している。募集は公募で行い採用については大学規定のルールのもと行っている。昇格については毎年、研究業績・教育・管理業務等の実績調査を該当者に実施し、学科の基準を満たした者については学科教授会の推薦により昇格できるようにしている。2020 年度には、准教授から教授への昇格者 1 名を輩出した。	大学の制度である依命留学は、毎年候補者を検討している。2020 年度前期は昨年度から引き続き准教授 1 名が留学していた。教育に関して、教育改善委員会、教育点検委員会、技術者教育検討委員会、非常勤講師懇談会、教育システム評価委員会等を組織しており、また私情協から情報提供を受けける FD 実施への参加を促したり、さらに研究に関して、大学が実施する科研費応募のための申請書作成の講習会への参加を促したり、全分野にわたる学生の卒論発表会に参加してもらい幅広い研究に触れる機会の増加を図ったりするなどして資質の向上・改善につなげている。	教員組織の適切性は毎週 1 回開催される教員会・教育改善委員会で、また定期的に開催されるその他の各委員会において点検・評価されている。2020 年度の教員組織には問題がなかったことから、改善・向上に向けた各教員の資質向上へ向けた取り組みを継続して実施していくことにした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・幅広い教育・研究活動を実現できている。	【長所】 ・透明性の高い人事を実現できている。	【長所】 ・幅広い議論の場、情報交換の場を設けている。	【長所】 ・毎週 1 回全員参加の会議を開催していることで、迅速な対応が可能である
	【特色】 ・なし	【特色】 ・所属学生を均等に配分することで、各教員の教育上の負担が均等になるようにしている。	【特色】 ・本学では職階毎の人事枠の規定はないので、点数化された基準を満たせば昇格できるようになっている。	【特色】 ・技術者教育機関として外部(JABEE)から認定されるほど多様な教員の質の向上策及び教員組織の改善策を実行している。	【特色】 ・学外(卒業生や技術士)からの評価を取り入れる仕組みを有している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今後、現在より少ない教員組織へと移行しなければならない。	【問題点】 ・学生の所属を均等にすることで、学生の要望を十分に取り入れた教育上の体制となっていない場合がある。	【問題点】 ・昇格者の増加により、従来、助教等が行っていた業務を准教授・教授となっても担当してもらわなければならない。	【問題点】 ・多数の委員会が存在しており、会議のために多くの時間をさかなければならない。	【問題点】 ・学外者からの組織の評価と高校生の興味は一致しないので、入学志願者の増加につながらない。
	【課題】 ・少ない教員数で実効性の高い方針を検討し、明示していかなければならない。	【課題】 ・ディプロマ・ポリシーと学生の要望の整合を図りつつ、教員組織の編成について検討していかなければならない。	【課題】 ・職階で業務を限定しないようにする。	【課題】 ・会議は少なくして実効性の高いものにしていく必要がある。	【課題】 ・社会のニーズと多くの高校生の興味との整合を図るべく広報活動が必要である。
根拠資料名	教員組織の方針と編成 (a3-①-1)	教員組織の方針と編成 (a3-①-1)	昇格に関する業績等調査依頼・回答書 (a3-③-1)	各種委員会名簿 (a3-④-1) 留学報告書 20 年 8 月 (a3-④-2)	教育改善委員会議事録一覧 (a3-⑤-1) 教育システム点検委員会議事録 (a3-⑤-2)

学部地域環境科学部

学部長小梁川 雅

学科名造園科学科 鈴木貢次郎

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ 講じている	☒ 講じている	☒ 行っている	☒ している	☒ 行っている
点検項目に対する 現状説明	造園科学科の授業科目は、第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を基本とし、自然科学と社会科学を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指し、自然との共生社会・循環型社会等への対応や本学科の方針をふまえて各科目に対応する具体的な学習・教育到達目標として、8項目を設定している。	前期、後期の学年ガイダンスにおいて「学習教育到達チェック」を学生個々に実施し、「学生の学習目標達成度」の自己評価と把握が実施できる。	造園科学科 JABEE ワーキングにより「授業のファイル」の作成・保管・点検を通じ、成績評価、単位認定及び学位授与が適切に運用されているかが確認できる。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行っている。また、前期・後期の学年ガイダンス時には、各学生による目標達成度チェックを実施し、達成度に応じた学生への学習指導を行っている。	点検評価のため、学生による授業評価、卒業生からの意見集約、定期的な学科教員会の他、非常勤講師・客員教授へのヒアリング調査を通して、授業担当者間において相互理解を図るとともに、現状認識と点検評価、改善の方向の検討を行っている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ①「環境計画・設計分野」、「ランドスケープ資源・植物分野」、「景観建設・技術分野」の3 分野の専門科目を基幹とした構成、②上記3 分野の専門科目の分野横断・総合化的科目の講義・実習・演習と基礎と体験的学習科目から応用・将来の進路、実社会のニーズに即した専門科目の選択が可能な秩序を持った段階的な構成に加え、③地域環境科学部の学部共通科目などと連動した複合的・総合的なカリキュラム構成をとることにより、先鋭化をはかることが大きな特色となっている。	【長所】 学生個人による「学習教育到達チェック」を行うことで、学生各自の学習状況を教員が把握できる。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検に合致している。 JABEE認定のほか「樹木医補」、「測量士補」、「自然再生士補」の「資格認定」に対応したプログラムの他、所定の科目を履修、単位を修得し、卒業後一定の実務経験を経て「受験資格」が与えられる「造園施工管理技士（2 級）」、「土木施工管理技士（2 級）」も提供し、学生の学習活性化強化をも目指している。	【長所】 「授業のファイル」の作成・提出により、授業シラバスの 15 回の定期的点検、成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているかを教員相互が点検することが可能となる。	【長所】 学生個人による「学習教育到達チェック」を行うことで、学生各自の学習状況を教員が把握できる。 造園科学科 JABEE ワーキング「授業のファイル」の作成・点検を通じ、成績評価、単位認定及び学位授与が適切に運用されているかが確認できる。	【長所】 年度末に非常勤講師・客員教授へのヒアリング調査を実施し、学科の教育課程及びその内容、方法の適切性や社会のニーズとの関連性などを学科教員が認識でき、点検評価、改善の方向性の検討を相互に実施できる。

	【特色】 第三者機関の審査に耐えうる教育体制 の点検を行なえる。	【特色】 第三者機関の審査に耐えうる教育体制 の点検を行なえる。	【特色】 第三者機関の審査に耐えうる教育体制 の点検を行なえる。	【特色】 ・第三者機関の審査に耐えうる教育体制 の点検を行なえる。	【特色】 ・第三者機関の審査に耐えうる教育体制 の点検を行なえる。
現状説明を 踏まえた問題 点及び次年度 への課題	【問題点】 2019 年度新カリ科目「専攻研究」（3 年 後期必修）を後期から開始したが研究 室と人数配分などの関係性に課題があ りあり、今後人数調整などを実施しよ り質の高い教育・研究体制の構築が必要。	【問題点】 JABEE 認定のほか「測量士補」、「自然 再生士補」の「資格認定」を受けた学 生の卒業後の取得状況の把握。	【問題点】 造園科学科以外の教員や非常勤講師の 方への「授業のファイル」作成・配布 と回収業務に多くの時間を費やす必要 性があり、今後は JABEE の在り方につ いての議論を深める必要がある。	【問題点】 編入生（特に短期大学部からの編入正） が低学年で履修すべき科目が多く、学 生の過負担と履修モデルに即した体系 化が損なわれる可能性がみられたが、 短期大学部が募集停止となったため、 今後は編入生が少なくなり、従来の問 題は解消されると思われる。	【問題点】 学習障碍など多様な学生に対する授業 とその対応、学力不振学生に対する個別 指導やそれらに関連する業務が年々増 大増しており、教職員の負担が大きく、 一般学生に対峙する時間が低減してしま う可能性もあり両者のバランス確保 は大きな課題である。
根拠資料名	造園資料①造園科学科カリキュラムと 学習・教育目標 造園資料②専攻研究シラバス	造園資料③学習教育到達チェック 造園資料④樹木医補取得状況	造園資料⑤JABEE ワーキング・授業 のファイル	造園資料③学習教育到達チェック 造園資料⑤JABEE ワーキング・授業 のファイル	造園資料⑥非常勤講師へのヒアリング資 料 造園資料⑦修学支援等関連書類

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している	☒ 行っている
点検項目に 対する 現状説明	6 月，8 月に実施されるオープンキャンパスなどの機会を通じ、入試に関する説明会を行い、学生募集の機会と学科の内容を周知できるように努めている（2020 年度はオンラインによる）。 入試制度は、センター試験利用型入試、一般入試の他に多様な推薦・優先入試などがある。 造園科学科では、教育・研究・就職等の特徴を考え、首都圏のみならず地方の高校、農業系高校からも学生を採用すべく継続的な議論を実施している。推薦・優先入試における入学者の選抜においては、小論文、口頭試問の内容を検討し、学科教員を可能な限り分野や職階の異なる編成により、面接などを実施している。試験終了後は全教員により合否判定を行っている。センター利用型、一般入試についても、合否判定は学科の全教員が参加して行っている。	推薦入試においては、面接時に造園科学科のアドミッションポリシーの理解度の確認を行い、ディプロマポリシーとの相違がないかを確認している。 一般入試に関しては、大学ホームページや大学案内に加え、オープンキャンパスに伴い学科案内の誌面の見直しを行い、写真やイラストなどを多く採用し、造園科学科の取り扱う領域を今まで以上にビジュアルで理解できるように改めるなど、改善・向上に向けた取り組みを行なった。また大学 HP の造園科学科のオリジナルサイトの改定につとめた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 卒業生は主として造園界（公務員、中学理科教員、高校農業科教員、造園計画・設計事務所、造園建設系企業、住宅関連企業、ナーセリー、生花関連企業など）への就職の他、本学大学院造園学専攻などへの進学に進路を求める者も少なくなく、進路は広域な造園界の全ての職域にわたっており、社会においては造園技術者の中核として活躍するなど、本学科の入試成果が有効に活用されていることを裏付けていると思われる。	【長所】 多くの入試制度が異なる時期に実施されることは、受験生確保の点からも意義は大きい。
	【特色】 センター試験利用型入試、一般入試、各種推薦・優先入試など、多様な入試制度と各地域から学生を確保することで多様な人材が確保できる。	【特色】 HP 及び学科案内の誌面の見直しを行い、写真やイラストなどを多く採用し、造園科学科の取り扱う領域を今まで以上にビジュアル化したことで、造園が取り扱う領域の広がりが受験生に具体的に理解できるようになった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 様々な入試制度で多様な人材が確保できる反面、学力のバラつきが少なくなく、学生のレベル設定をどこに重点を置くかが困難となる。	【問題点】 造園学の独自性に対して興味をもてるような紹介が必要な一方、将来プロフェッショナルとして修学すべくカリキュラム内容に対する嫌悪感の乖離が起きている。
	【課題】 造園科学科の魅力の周知と地域創成科学科との相違点など。	【課題】 学習意欲が減退している学生が近年増加傾向にあり、その結果不登校や・休学・退学する学生がおり、その対応に費やす時間と対応の仕方に苦慮している。
根拠資料名	造園資料⑧合否判定評価基準 造園資料⑩2020 年度大学案内	造園資料⑧合否判定評価基準 造園資料⑨2020 年度学科指針 造園資料⑩2020 年度大学案内

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している	☒ している	☒ 行っている	☒ 一部つなげている	☒ 一部行っている
点検項目に対する 現状説明	学生数の減少などに伴い、時代に合わせた体制にするように、専門分野ごとに適切な人材が配置されるように議論した。	学科教員の補充、昇格を実施し、教員組織の充実をはかった。 5 研究室体制（1 研究室 3 人の教員）になるように了承を得た。関係部署（教授会）より承認され、2021 年度より実施する。	新規嘱託教授の採用申請を行い、承認を得た。また 2 名の教員の昇格申請の承認を得て、造園科学科を構成する 3 分野の教員組織の充実を図った。	異なる専門分野の人員配置についてはバラツキがあったが、教員の新規採用、昇格の実施に伴い教員組織の改善につなげる努力を継続的に検討してきた。	大学院新研究科設置に関連する昇格人事を行い、より適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 学科における教員編制が充実する。	【長所】 優秀な教員の採用、昇格に伴い教育研究活動を展開することが可能となる。	【長所】 今後の検討で組織の充実・改善にも適切な対応が可能である。	【長所】 2019 年度 4 月採用、及び昇格が実施され、学科における教員編制が充実する。
	【特色】 専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 新たな教員確保に伴い、学科教育の充実が図れる。	【特色】 優秀な教員の採用、昇格に伴い学科内の教育研究活動が活性化される。	【特色】 継続的な指導体制を整えることができる。	【特色】 現状における人材確保の予定分野が明確である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今後学科内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 今後定年を迎える教員が連続し、学科内の教員数と年齢構成の階層を十分に検する必要性が認められる。	【問題点】 研究環境の問題から昇格に必要な条件を十分に確保できない教員への支援体制が必要なこと。	【問題点】 今後、教員の数と時期を適切に考え、組織の充実・改善を検討する必要がある。	【問題点】 特になし
	【課題】 教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要がある。	【課題】 教員確保に向けた研究内容の充実を図る必要がある。	【課題】 昇格に伴う業績確保に向けた研究環境の充実を図る必要と共に、新たな研究内容の体制を、各研究室で構築する必要性が考えられる。	【課題】 大学院組織と連携した今後の人事体制を構築できるよう検討が必要である。 また年齢構成上の問題がみられるのでその解決の検討を要する。	【課題】 大学院組織と連携した今後の人事体制を構築できるように検討を要する。
根拠資料名	造園資料⑩2020 年度大学案内 造園資料⑫2021 年 1 月教授会資料	造園資料⑪2020 年度採用・昇格書類 造園資料⑫2021 年 1 月教授会資料	造園資料⑪2020 年度採用・昇格書類 造園資料⑫2021 年 1 月教授会資料	造園資料⑪2020 年度採用・昇格書類 造園資料⑫2021 年 1 月教授会資料	造園資料⑪2020 年度採用・昇格書類 造園資料⑫2021 年 1 月教授会資料

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名小梁川 雅

学科名・専攻名地域創成科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」,「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって、教育課程を体系的に編成している。	実習科目と専門科目との関連性を説明し、必要に応じて講義資料等の見直しを指導している。また、実習科目では実習内容毎に資料を配付し、自主学習を促している。	シラバスに成績評価基準を明記し、それに従った評価および単位認定を行っている。卒業論文については評価について学科教員で情報を共有し、適切な指導がおこなわれているかを確認している。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。また、卒業論文などの総合的な科目において、低学年での学習成果についても確認をおこなっている。	教員全員が参加する教育点検委員会において教務関連事項について審議している。特に実習科目においては別途学科内委員会（実習検討委員会）を組織し、実習内容の検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 1 年次から「地域づくり」を意識した教育を実施している。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 実習等の機会を通じて、ポートフォリオの作成を指導している。	【長所】 実習科目の連関を意識した検討を行っている。
	【特色】 1 年次から実習科目を前・後期に配置し、実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し、地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 1 年次から実習科目を前・後期に配置し、実践的教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 新型コロナ感染拡大により、一部の実習内容の見直しをおこなう。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 卒業生アンケートなどを利用し、卒業時の学生の学生成果について把握する。	【課題】 特になし
根拠資料名	学生生活ハンドブック [カリキュラム] 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	シラバス [土と水の科学&フィールド実習（一）&地域環境論，測量学&測量実習]	シラバス [地域交流実習] 令和 2 年度 地域創成科学科 第 37 回教員会議議事録	履修のてびき 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	地域創成科学科 学内委員リスト

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	理系，文系を問わず，「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集し，様々な選抜試験を行っており，その結果を公表している。	入試選考会議は全教員が参加することとしており，学生の受け入れの適切性は担保されている。また，次年度（令和4年度）入試の定員数、受験科目についても、これまでのデータを元に協議した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 一般入試，センター試験入試では，学内他学科に比べて，幅広い科目選択を可能としている。また，推薦入試では「地域づくり」を意識した小論文を課し，選抜を行っている。	【長所】 理系，文系を問わず，幅広い人材を募集している。
	【特色】 大学案内では，「地域づくり」をキーワードとした学科紹介を行い，アドミッションポリシーを意識させている。	【特色】 「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	大学案内 2020 [2020 年度入試制度] 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和2年度 地域創成科学科 第41回教員会議議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学及び本学部の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、本学科の教育研究上の目的、教育目標及び3つの方針を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置する、としている。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において、優れた教育能力、研究能力を備え、地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	定期的に業績調査を行っており、学科教授会において審議し、本年度は准教授から教授への昇格人事を行った。なお、退職教員の後任の募集に関する手続きを進めている。	学科教授会が中心となり、海外留学の機会を通じた新たな研究シーズの発見、これまでの研究領域の応用展開が期待できる若手教員に対して、積極的に海外留学を認めている。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【長所】 地域創成科学科の人材育成目標の達成と円滑な学科運営を重視している。	【長所】 年齢に関係なく、十分な業績を有し、学科運営に積極的な人材を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり 3 名の教員を配置し、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【長所】 ・
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【特色】 「地域づくり」という幅広い研究領域に対応している。	【特色】 特になし	【特色】 実習は全教員が参加することで、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 ・
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 大学院後期課程の設置に向け、定期的に業績チェックを行う必要がある。	【課題】 特になし	【課題】 ・
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	令和2年12月15日（火）東京農業大学 合同教授会議事概	入江准教授留学申請書・同意書（平成30年度提示資料に同じ）	

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名小梁川 雅

学科名・専攻名森林総合科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	◎ カリキュラム改正 次期カリキュラム改正に向けて、分野・研究室体制、学科専門科目の科目、必修・選択の区分、内容、担当者、配当学年・学期などの見直し、カリキュラムツリーならびに履修モデルなどの作成を行う。	◎ 卒業生の質保証 問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力やプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。	◎ 大学院進学者の増加に向けた取り組み 入学定員の充足を図るべく、専門基礎能力の涵養に努め、新規研究領域の開拓や研究手法の開発に取り組む。
実行サイクル	<u> 4 </u> 年サイクル（令和 2 年～ 5 年）	<u> 1 </u> 年サイクル（令和 2 年～ 年）	<u> 1 </u> 年サイクル（令和 2 年～ 年）
実施 スケジュール	① 現行カリキュラム（講義、実習科目）の問題点・課題抽出、現行の実習科目内容の問題点・課題抽出 ② 学科専門科目の科目、必修・選択の区分、内容、担当者、配当学年・学期などの見直し ③ カリキュラムツリーおよび履修モデルの作成、学外（演習林等）実習科目の実施スケジュールの作成 ④ 履修モデル、および時間割の作成	研究室単位で行う 3 年生の専攻実験実習や 4 年生の卒業論文研究を通して、問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力、プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。そのために、各研究室において課題研究発表や、卒業論文の所信表明、中間発表、成果報告会に取り組む。	専攻実験実習や卒業論文指導などを中心として、研究室活動の一層の充実を図る。具体的には、学生参加型のゼミの開催や学習成果の発表機会の確保、学外実習の充実などに取り組む。
目標達成を測定する指標	① 新カリキュラムにおける学科専門科目の確定 ② 新カリキュラムにおける実習科目の内容、スケジュール確定 ③ カリキュラムツリーの作成 ④ 履修モデルの作成 ⑤ 時間割の作成	① 専攻実験実習などにおける情報収集（文献調査など）やプレゼンテーションの評価 ② 卒業論文の所信、中間、成果発表会や、提出論文などに関する評価	① 専攻実験実習などにおける評価 ② 卒業論文の所信、中間、成果発表会、提出論文に関する評価 ③ 学外実習機会の確保状況の確認など
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	学科将来構想委員会における分野組織の変更をすすめている。これに伴ってカリキュラム、実習などの見直しを行う。学科全体の結論には至っていない。短期的な対応は随時行っている。	卒業論文については、各研究室で対応している。要旨や発表会などの連絡は学科全体で行う。横断的な発表会の実施や実際に事業に携わっている卒業生との交流・中間発表なども各研究室単位で実施している。	大学院 1 期試験で、優秀な学生確保を行ってきた。しかしながら、定員を充足するまでには至っていない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・分野名変更に伴い、段階的な分野から視点や手法を特徴としている。科目配置、実習との関連性を検討中である。	【長所】 ・各実験、実習、学外活動など、すでに「アクティブ・ラーニング」の要素を取り入れてきている。	【長所】 ・意欲の高い院生の確保 大学院専攻の発表会に多くの学部学生が参加している。
	【特色】 ・長期方針については学科将来構想委員会、短期方針については学科教育点検実務委員会で検討している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教職・学術情報課程の資格取得基礎科目との関連	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	学科教育点検実務委員会資料＊ 森林総合科学科ポリシー改正、森林総合科学科専門科目、カリキュラムと CP,DP との関係	森林総合科学科研究室紹介 卒業論文発表要旨集	林学専攻（説明会）、2020 年度修士論文発表会プログラム

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	目 標	◎ 学内での連携による研究の推進	
実行サイクル	学科内、学部内、学内における研究交流の実現。	◎ 学外関係者との連携による研究の推進	
実施 スケジュール	学外における研究交流の実現。		
目標達成を測定する指標	実行サイクル	2 年サイクル（令和2 年～ 令和3 年）	2 年サイクル（令和2 年～ 令和3 年）
自己評価 （☑を記入）	実施	実施	実施
目標に 対する 現状説明	スケジュール	単独研究あるいは同一専門内における研究に終始せず、学内他分野との連携強化を図り、共同研究の成果を論文などの形式により公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施。	学内における研究に終始せず、学外他分野との連携強化を図り、共同研究の成果を論文などの形式により公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	目標達成を測定する指標	① 連携実績の確認	
	② 研究計画策定の確認		
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	③ 成果公表（準備）の確認	① 連携実績の確認	
	② 研究計画策定の確認		
根拠資料名	③ 成果公表（準備）の確認		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	◎ 学科 PR 活動の強化 受験生の増加、質の高い学生確保に向けた学科広報のあり方を検討し、高校への出張講義や一般市民対象の講座など学内外において積極的な PR 活動を行う。また、学科パンフレットの見直しや学科関連の出版物刊行など PR 活動の充実を図る。	◎ 危機管理体制の改善・強化 学科内に既に設置してある「危機管理委員会」および「将来構想委員会」などの連携を強化し、各種ハラスメントおよび事故などの発生防止に努めるとともに、万が一の事案発生についてシミュレーションを行う。	◎卒業生（同窓会）との連携強化 同窓会組織等と連携し、相互に資する関係の強化を図り、学生の確保、卒業生の就業機会の確保に努める。また、同時に学科の社会貢献の一環として位置づける。
実行サイクル	___ 3 ___ 年サイクル（令和 2 年～ 令和 5 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 2 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 2 年）
実施 スケジュール	① 指定校を見直し、質の高い学生を確保 ② 高校への出張講義などを増加、学科の PR ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携を図り、大学・学部・学科の PR を行う ④ パンフレットなどの見直しを行う	① 危機管理委員会の開催 ② 将来構想委員会の開催 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携 ④コロナ禍に対応した映像・情報発信の確立	① 学科教員の同窓会活動への参加 ② 同窓生による学科学生のための各種行事（講座など）の開催 ③ 卒業生名簿などの整備
目標達成を測定する指標	① 指定校の見直しを確認 ② 高校への出張講義などの増加状況の確認 ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携実態の確認 ④ パンフレットなどの見直し状況の確認	① 危機管理委員会の開催確認 ② 将来構想委員会の開催確認 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携状況の確認	① 学科教員の同窓会活動への参加状況の確認 ② 同窓生による学生のための各種行事の開催状況の確認 ③ 卒業生名簿の整備状況の確認
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	指定校の見直しを行い提出した。高校への出張講義を行ったが、現状維持の状態である。森林関係の高校へ、献本やパンフレットを配布するなどの PR を行っている。	学科の危機管理委員会で、学生の運転に関するマニュアルを作成して実行中である。 演習林内での実習および調査・実験における安全の手引きを作成し、学生および教員に配布した。学科教員間の緊急連絡網を作成した。	林学同窓会常任幹事会に出席した。 卒業生と語る会を実施した。 学科卒業生対応実務委員会にて、林学同窓会役員を推薦した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科の特徴を活かした活動を行っている。	【長所】 ・学科の特徴を活かした活動を行っている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・高校への出張講義や PR は、現状維持の状態である。	【問題点】 ・問題が発生した場合の対応の仕方については、検討を要する。	【問題点】 ・林学同窓会活動の学生への PR と会費の徴収
	【課題】 ・具体的な効果についての検討も必要	【課題】 ・学生危機管理意識を高める必要性	【課題】 ・なし
根拠資料名	学科リーフレット、パンフレット改訂版 新研究棟の木材 DVD	学科教員の緊急連絡網、緊急時の基本的取り組み 演習林安全のてびき ハラスメント防止委員会 学生運転規則の作成、野外調査に際しての安全運転の配慮	林友会林業見学会、職場見学会 林学同窓会ニュース、同窓会記録、総会

学部名 地域環境科学部
学部長名 小梁川 雅
学科名 生産環境工学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生産環境工学科における基礎教育の改善	個人面談の実施と学生カルテの作成	教員による授業視察結果の活用法の検討
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	4 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	4 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	GPA1.0 以下の全学年の学生を対象に、年 2 回の個人面談を実施し、学生の就学状況の把握に努めている。また、リメディアル試験の成績不良者のうち、リメディアル科目の受講対象者から外れた学生に対して、数学の学習支援を行っている。	平成 29 年度の 1 年生から年 2 回の個人面談を実施し、学生カルテの作成と教育システムの改善方法の検討を行っている。	教員 1 人当たり年間 2 回（前期、後期各 1 回）の授業視察を課し、報告書を提出している。
目標達成を測定する指標	GPA の分布と推移。	学生と教員とのコミュニケーション回数。	学生による授業評価アンケート。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	理数系科目の基礎学力の低下が著しいため、平成 30 年度より数学の補講を学習支援として行ってきた。令和元年度には 19 名を対象として教員 1 名につき 1～3 名を分担して実施した。本年度はコロナ禍により実施できなかった。	平成 29 年度入学の 1 年生より個人面談を実施してきた。1 年次は前期・後期に各 1 回、全教員で対応し、2 年次は分野、3 年次は研究室、4 年次は卒論指導教員が対応している。当初、学生カルテは手書きで作成することにしていた。ところが本実行サイクル中に大学全体で電子カルテの導入が進んだ。さらに今年度コロナ禍にあったことから、リモートで面談を実施し、学生ポータル内の所定のカルテに情報は保存することにした。	平成 29 年度以前より継続して授業視察は実施している。今年度はコロナ禍にありほとんどの科目が遠隔授業であり、教材配信という形で開講するという異常事態であったことから、授業視察は実施できなかった。学生による授業評価は回答率が低く、今年度は特殊な講義形式となったため、授業評価への対応は任意とした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・基礎学力の向上を図り学力の差を小さくすることで、専門教育への導入を円滑にできる。 ・少人数できめ細かい教育が可能となる。	【長所】 ・個々の学生の学習状況を詳細に把握し、効果的な指導を実現できる。 ・学生のコミュニケーション能力の向上を図れる。 ・メンタル面のケアもできる。	【長所】 ・他の教員の授業の実施状況を知ることにより、自身の授業改善に活用できる。
	【特色】 ・正規の授業ではない補習的な教育を行っている。	【特色】 ・クラス担任制にとらわれず、より学生に近い立場にある教員が面談を実施している。	【特色】 ・職階と無関係に、相互に他の授業を評価し自分の授業の評価を受けている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・正規の授業ではないので強制力が乏しい。 ・教員は労働過多になりがちで学生は学習時間確保が難しい。	【問題点】 ・従来の手書きのカルテと学生ポータルの電子カルテが混在している。	【問題点】 ・今年度は実行できなかった。 ・視察結果が次年度へ反映されているか確認がなされていない。
	【課題】 ・学生のモチベーションの維持・向上を図る必要がある。	【課題】 ・手書きのカルテと電子カルテを統一する必要がある。	【課題】 ・視察の実効性の評価の検討が必要である。
根拠資料名	GPA の分布 (b1-①-1) 学生カルテ (b1-①-2)	学生カルテ (b1-①-2)	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学部生の学会参加の促進による専門分野への学生の意識向上	卒論発表会の実施による学科内での研究情報の共有	大学院進学率の向上
実行サイクル	__4__年サイクル（平成29年～令和3年）	__1__年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__年サイクル（令和元年～令和3年）
実施 スケジュール	教員が加入している学会での発表、シンポジウムへの参加を促進する。	1月下旬頃に学科全体で、8会場において同日開催している。1会場当たり2名の教員が出席し、評価に当たる。	入学式、教育懇談会において大学院教育を案内するとともに、学部3、4年生を対象に説明会の開催とアンケート調査を実施する（大学院入試の前の月（5月、12月）の2回）。
目標達成を測定する指標	参加状況のアンケート調査。	評価表。	受験者数の実績。
自己評価 （ ☒ を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☒ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☒ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	平成29年度には8名、平成30年には13名、令和元年度には7名、今年度はコロナ禍にあり、多くの学会での研究発表会が中止になった中、2名が学会発表を行った(実際には3月下旬、発表予定)。学生は年度ごとに入れ替わるため、学生の意識が向上したかは判定しにくい。	コロナ禍にあり、様々な活動等が制限される中、学生は卒業研究を行い、1月22日(金)に卒論発表会を、Zoomを利用してリモートで実施した。学生は発表会に向けて、研究のプランニング能力やプレゼンテーション能力の向上に努めた。また、発表会を公開で実施することで、学科で実施している研究を多くの学生に理解してもらう機会を創出している。	大学院進学率は研究に対する学生の興味を図る指標と考え、その向上を図ってきた。進学説明会を7月29日と12月11日に実施した。アンケート調査は実施できなかった。本学科の大学院進学率は、景気に左右される求人倍率の影響を直接受け変動が大きい。今年度の内部進学者数は0であった。令和3年度入試では6名が合格し来春入学予定である。進学率は向上したものの例年根並みに戻ったという状況である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・関係専門分野への関心や、貢献心を高揚できる。	【長所】 ・学科内教員間で情報共有ができ、教員間の意識が向上する。	【長所】 ・優秀な大学院生の確保によって研究レベルが向上する。
	【特色】 ・会費助成の活用により他の大学に比し優位に展開できる。	【特色】 ・教員の専門分野の相互理解が深まり、常に前向きな議論が出来る。	【特色】 ・大学院農業工学専攻ではバイリンガル教育を実施しており、毎年一定数の留学生が入学しているものの、内部進学者は少ない傾向にある。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・学生や教員の授業日と学会日程との不整合が生じる場合がある。	【問題点】 ・開催当日に授業がある場合、教員は出席できない場合がある。	【問題点】 ・内部からの大学院への進学率が低い。
	【課題】 ・学生の基礎学力や研究レベルの低下は課題である。	【課題】 ・なし	【課題】 ・優秀な日本人大学院生を確保することが課題である。
根拠資料名	学会発表者（b2-①-1）	卒論発表会（b2-②-1）	大学院在籍者 2019-2020（b2-③-1）

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	地方出身の優秀な学生確保	学科の課外活動組織（農工会）主催の就職セミナー、 業界研究会の開催による専門性を活かした就職支援	学科の課外活動組織（農工会）主催の現地見学会の実施
実行サイクル	<u> 4 </u> 年サイクル（平成28年～令和2年）	<u> 4 </u> 年サイクル（平成28年～令和2年）	<u> 1 </u> 年サイクル（令和2年～令和3年）
実施 スケジュール	毎年6月上旬に行う指定校推薦を活用する。 入学後の成績・就職先について追跡調査を行い、指定校との関係を 樹立し、育んでいく。	3年次生対象に12月に業界研究会を、また4年次生を対象に4月に就職 セミナーを開催する。	令和2年度は、学生の授業を勘案し、休校日となる1月の大学 入学共通テストの準備日に実施する。
目標達成を測 定する指標	地方出身学生の就職先。	専門性を活かした就職先への就職率。	就職先との関係の深化。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	指定校入試の指定校を見直しでは、昨年度の地方の農業高校を中心と した12校の追加に加えて、今年度新たに8校を追加した。内3校は 関東圏外の高校であり、3校は実業高校である。指定校推薦入試での 実績として、平成29年度入試では5名、30年度6名、31年度4名、 令和2年度9名が関東以外の高校より入学している。一定数の入学者 は確保しているが追跡調査等は実施できなかった。	平成28年から令和元年まで前期後期と毎年2回就職セミナー（業界研究 会）を開催してきた。本年度はコロナ禍により実施できなかった。	平成28年度から毎年1回実施してきた現地見学会であるが、今 年度の現地見学会はコロナ禍により実施できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・地方公務員の求人への対応により、地域社会への貢献度が増す。	【長所】 ・学科の社会貢献をアピールでき、卒業生からの要求に応えられる。また、 就職先を意識した修学意欲の向上に繋がる。	【長所】 ・教員の実施する共同研究や卒業生の就職先等と連携した見学 会であることから、一般者は見学できない専門的な施設等の見学 が可能である。
	【特色】 ・農大で専門教育を受けた学生を地域に帰す（＝人物を畑に帰す）	【特色】 ・学科の専門教育を受けた卒業生が全国で活躍できる（人物を畑に還す）。	【特色】 ・卒業生がサポートしてくれるケースが多い。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・地方の優秀な学生を確保する方策に乏しい。	【問題点】 ・地方の優秀な学生を確保する方策に乏しい。	【問題点】 ・在学生の参加希望者が限定されている
	【課題】 ・指定校のランク調査の信頼性と入学者の成績の関係については課 題である。	【課題】 ・セミナー開催時期の選定と担当教員の負担が課題である。	【課題】 ・授業日と重なるため、実施日の確保が難しい。
根拠資料名	指定校新規選定（b3-②-1） 指定校入学者2016-2020（b3-①-2）	農工会業界研究会・就職セミナー2019（b3-②-1）	農工会現地見学会2019（b3-③-1）

学部・研究科名	地域環境科学部
学部長	小梁川 雅
学科	造園科学科 鈴木貢次郎

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	都市環境から自然環境に至るまでの育成と保全に科学的かつ実践的に対応できる者を養成することを目標とする。	新たな環境を計画的、デザイン的に創成できる者を養成することを目標とする。	技術と実践力をもって自然環境の利活用を生態技術的、環境芸術的に処理できる者を養成することを目標とする。
実行サイクル	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）
実施スケジュール	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、自己点検を含めた、技術者教育の確認を継続する。また、第三者の審査による教育体制の点検を行う。	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、自己点検を含めた、技術者教育の確認を継続する。また、第三者の審査による教育体制の点検を行う。	カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して学生の学習目標達成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し、自己点検を含めた、技術者教育の確認を継続する。また、第三者の審査による教育体制の点検を行う。
目標達成を測定する指標	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施する。 また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し、点検、評価、を実施する。	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施する。 また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し、点検、評価、を実施する。	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施する。 また、学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し、点検、評価、を実施する。
自己評価 (☑を記入)	☑達成した	☑達成した	☑達成した
目標に対する現状説明	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行っている。また、前期・後期の学年ガイダンス時には、各学生による目標達成度チェックを実施し、達成度に応じた学生への学習指導を行っている。 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認している。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行っている。また、前期・後期の学年ガイダンス時には、各学生による目標達成度チェックを実施し、達成度に応じた学生への学習指導を行っている。 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認している。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように、成績評価の基準を明示するとともに、答案やレポートの返却を行っている。また、前期・後期の学年ガイダンス時には、各学生による目標達成度チェックを実施し、達成度に応じた学生への学習指導を行っている。 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認している。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得ており、自然科学と社会科学を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得ており、自然科学と社会科学を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得ており、自然科学と社会科学を包括した造園学の総合的かつ実践的教育を目指すことが可能となる。
	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により、目標が適切に実施されているかが教員相互で点検することが可能となる。	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により、目標が適切に実施されているかが教員相互で点検することが可能となる。	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により、目標が適切に実施されているかが教員相互で点検することが可能となる。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 JABEE 認定の継続	【問題点】 JABEE 認定の継続	【問題点】 JABEE 認定の継続
	【課題】 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽出、課題の検討が必要である。	【課題】 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽出、課題の検討が必要である。	【課題】 現在「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽出、課題の検討が必要である。

2020（令和 2）年度 包括的な点検・評価報告書

様式 2

根拠資料名	造園資料①造園科学科カリキュラムと学習・教育目標 造園資料③学習教育到達チェック 造園資料造園資料⑤JABEE ワーキング・授業のファイル 造園資料⑥非常勤講師へのヒアリング資料 造園資料⑬シラバス第三者評価	造園資料①造園科学科カリキュラムと学習・教育目標 造園資料③学習教育到達チェック 造園資料造園資料⑤JABEE ワーキング・授業のファイル 造園資料⑥非常勤講師へのヒアリング資料 造園資料⑬シラバス第三者評価	造園資料①造園科学科カリキュラムと学習・教育目標 造園資料③学習教育到達チェック 造園資料造園資料⑤JABEE ワーキング・授業のファイル 造園資料⑥非常勤講師へのヒアリング資料 造園資料⑬シラバス第三者評価
-------	--	--	--

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	造園科学の基本である植物、植生、そして自然を科学し、生物技術による環境創成を扱うことを目標とする。	地域らしさを常に考え、地域の環境計画と場のデザインに貢献する造園手法を追求することを目標とする。	造園科学が適用される空間を建設するエンジニアリング分野で、建設技術工学、建設施工管理の理論と実務を扱うことを目標とする。
実行サイクル	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）
実施 スケジュール	日本造園学会、芝草学会、樹木医学会などの活動を行う。 国際学会等の活動を行う。	日本造園学会、都市計画学会、土木学会等学会などの活動を行う。 国際学会等の活動を行う。	日本造園学会、日本測量協会、日本写真測量学会などの活動を行う。 国際学会等の活動を行う。
目標達成を測定する指標	学会の運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業	学会の運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業	学会の運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業
自己評価 (☑を記入)	☒ 一部達成した	☒ 一部達成した	☒ 一部達成した
目標に 対する 現状説明	日本造園学会を中心とした関連学会活動や学会発表を行った。	日本造園学会などの主催による地域環境計画へ学生が参加し、教員がその指導にあたっている。	学部生・院生・教員による景観建設分野に関する研究が継続的に実施されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 専門分野での研究の充実が図れる。	【長所】 専門分野での研究の充実が図れる。	【長所】 専門分野での研究の充実が図れる。
	【特色】 造園における植物分野の研究成果を社会へアピールすることが可能。	【特色】 コンペや学会主催の地域環境計画へ学生・教員が参加することで造園の社会性をアピールすることが可能となる。	【特色】 造園におけるエンジニアリング分野の新たな技術開発が可能となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 教育・研究とのバランスに配慮する必要がある。	【問題点】 教育・研究とのバランスに配慮する必要がある。	【問題点】 教育・研究とのバランスに配慮する必要がある。
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	造園資料⑭学会発表資料	造園資料⑮学会（学生コンペ）発表資料	造園資料⑯学会発表資料

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	海外研究機関や組織等との学術交流によるグローバル教育の推進 学部や学科の組織と海外の大学あるいは研究組織との学術連携により、交流を図る。	産・官・学の連携による実学教育の推進	地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進
実行サイクル	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）
実施 スケジュール	海外の研究者、技術者による特別講義開催、学術交流校等との共同プロジェクト研究等の実施によりグローバル社会への適応能力向上を図る。	産・官・学との連携により、実践的な演習・実習授業およびフィールドワークを通しての実務能力の向上を図る。	地域との連携により、実践的な研究プロジェクト等の実施による実務能力およびコミュニケーション能力の向上とともに、社会的意義の高揚を図る。
目標達成を測定する指標	学術交流にかかわる特別講義、特別授業、あるいは共同研究プロジェクト等の実施、教員や学生の海外留学・受入などによって評価する。また、それらの継続的交流のためのプログラムを作成する。	演習等における設定課題テーマの内容、課題成果の発表・講評を実施する。	各地域や造園業界で実践的に活躍する方々を招聘した講演会や特別プログラムの実施状況。
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ 一部達成した	☒ 一部達成した	☒ 一部達成した
目標に対する 現状説明	海外の研究者により特別講義、特別授業については、大学院造園学専攻が主体となって実施した。 ドイツオスナブリュック応用科学大学とのコロキウム（懇談会）の実施、MOU 締結に向けての準備を行った（2021 年 1 月 14 日、オンライン会議により実施）。 教員 1 名の海外協定校への留学の了承を得た（2021 年度後期から 1 年間）。	造園関連産業の第一線で活躍する方を非常勤講師に迎え、世田谷区を対象とした造園総合演習（3 年後期）では、講評会には世田谷区の関係者の方にも参加して頂いた。	学生・地域住民を対象としたオープンカレッジ（農大サポート）を実施、本学卒業生を講師とした技術指導を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 海外大学との交流	【長所】 学科独自の教育・特別プログラムの提供	【長所】 造園卒業生や組織との連携や地域連携が可能。
	【特色】 日本人学生の海外留学や海外協定校との交流。	【特色】 アクティブ・ラーニングと連動したプログラムとし位置づけができる。社会に対する学生目線の造園学のアピールが可能。	【特色】 地域連携や実践者による教育・研究の提示と社会貢献の推進。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受入側の英語力の向上	【問題点】 特になし	【問題点】 平日での実施の可能性を探る
	【課題】 招聘にともなう予算確保など。	【課題】 特になし	【課題】 連携内容や社会貢献のアピール活動の強化。
根拠資料名	造園資料⑰台湾・中興大学への派遣申請	造園資料⑱造園総合演習シラバス	造園資料⑲農大サポート

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名小梁川 雅

学科名・専攻名地域創成科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	学科の目的である「水資源や食料生産，環境保全等の役割を担ってきた農山村地域の保全・再生，持続的発展など、地域の創成に貢献できる人材を輩出する」ため，学科のディプロマポリシーを学生に周知し，それに基づく教育を実践する。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～ 令和 3 年） ※新型コロナウイルス感染防止対策のあおりを受け、カリキュラムサイクルが1年延長された
実施 スケジュール	(1) 講義・実習・演習を通じて農山村地域の現状と課題に関する学びを深めさせる。(1～2 年次) (2) 地域との協働を通じて農山村地域の持続的発展に必要な技術と経験を身につけさせる。(2～3 年次) (3) 出口である就職先を意識させるとともに各研究室において専門的な教育・研究を実施する。(1～4 年次)
目標達成を測定する指標	(1) フレッシュマンセミナーの実施記録 (2) 地域交流実習，フィールド実習(一)(二)の成果 (3) 総合実習(一)(二)の成果 (4) 卒業論文の成果
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	本年度は地域創成科学科の設立 4 年目にあたる。先述した教育に関する総合的事項の目標と実施スケジュールに基づき、2 年次の総合実習(一)及び総合実習(二)までの各種実習において、(1)農山村地域の現状と課題に関する学びを深めさせる計画であったが、新型コロナウイルス感染防止の観点から対象地としていた群馬県川場村での実習ができず、当初の計画を変更せざるを得なかった。必要に応じて遠隔授業を行い、大学の感染防止規定で実施可能な世田谷区内での実習に変更して実施した。(2)出口である就職は、創設 4 年目の本学科では初めてのことであり、昨年度から十分に学生への意識付けを行ってきたが、コロナ禍の中で学生は、制約的な就職活動を強いられた。研究室活動では専攻実験実習(一)や研究室活動を通じて、専門的な教育・研究を行ったが、調査、巡検、取材など野外活動は制約された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な地域との連携実績があること、学生定員数が少ないこと、各教員の専門分野が多岐に及ぶこと、などを積極的に活用することによって、地域創成科学科ならではの教育が可能となる。
	【特色】 ・現地での作業・交流・調査に加えて、演習室での議論・取りまとめ・プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育をおこなっているが、コロナ禍により Zoom を用いた遠隔対応とせざるを得ない場面が多かった。
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・なし
問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・なし
根拠資料名	・学科ホームページ ・2020 フレッシュマンセミナースケジュール

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	競争的研究資金等の積極的な導入により地域創成に関わる実学研究を推進させる。また、学会発表や学術論文、シンポジウム等を通じて、最新の研究成果を学外に積極的に発信する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2 年～ 令和 3 年）
実施 スケジュール	(1) 研究資金獲得：原則として教員全員が競争的研究資金に申請 (2) 研究成果発表：国内外の学会大会や学術雑誌等で研究成果公表 (3) 活動成果発信：学科 Web 等で活動成果を発信する
目標達成を測 定する指標	(1) 研究資金の申請・獲得状況 (2) 研究成果の公表状況 (3) 学科 Web 等での研究成果発信状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科内の教員を含め研究代表者または研究分担者として競争的研究資金への申請を積極的に行っている。各教員がそれぞれの専門分野において積極的に活動し、成果を公表している。個別具体的な研究成果については、自己点検評価の一環として大学の公式 HP に掲載されており、そちらを参照して頂きたい。また、平成 3 1 年度で終了した、大学戦略研究プロジェクト「伝統的農地管理による生物多様性ならびに国土保全の評価と持続的地域防災マネジメントの構築」の対象地（佐賀県みやき町、熊本県阿蘇等）において関連の深い教員が継続的に地域創成に関わる実学研究を行っているが、今年度はコロナ禍のため現地に赴くことができず、実施できていない（根拠資料参照）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各教員の専門分野が多岐にわたる
	【特色】 ・それぞれの専門分野を活かした研究を実施するとともに、戦略研究プロジェクトなどを通して、分野横断的な活動をおこなっている
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	・平成 28 年度～平成 30 年度 東京農業大学 大学戦略研究プロジェクト研究課題「伝統的農地管理による生物多様性ならびに国土保全の評価と持続的地域防災マネジメントの構築」調査研究報告書 ・学科ホームページ

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	様々な地域を対象とした「地域づくり」プログラムの実施
実行サイクル	____1____年サイクル（令和 2 年～ 令和 3 年）
実施 スケジュール	(1) 学科教員が個人的に実施する地域連携プログラムを推奨・支援する。 (2) 学科として組織的に実施する地域連携プログラムへの参加を促し、学生への教育にフィードバックする。
目標達成を測 定する指標	(1) 地方自治体等と共同研究を推進するための補助金等の獲得状況 (2) オープンキャンパス等における活動成果の公表状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各教員の活動エリアは熊本県阿蘇地域、長野県小谷地域、福島県鮫川村、岩手県・宮城県沿岸地域など、多岐にわたっている。学科としては特に群馬県川場村との連携が盛んであり、学外実習を実施するとともに、個人や研究室レベルでも頻繁に行き来している。学生に対してはポータルや講義・演習を通じて、これらの活動への積極的な参加を呼びかけており、行き先や活動内容に応じて数名～20 名程度の学生が参加している。活動成果の一部はパネル化し、オープンキャンパス等で一般に向けて公表した。さらに、学科 HP において、学科ニュース・研究室ニュース・学科ブログ・地域創成最前線(ポスター集)といった項目を立て、地域連携を含めた学科の活動内容を公表している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科及び各教員の地域連携プログラムを積極的に奨励・支援することで、研究・教育活動を活性化している。
	【特色】 ・地域創成科学科の設立目的である「地域づくり」に向けて、実践的かつ科学的な活動をおこなっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	・学科ホームページ